

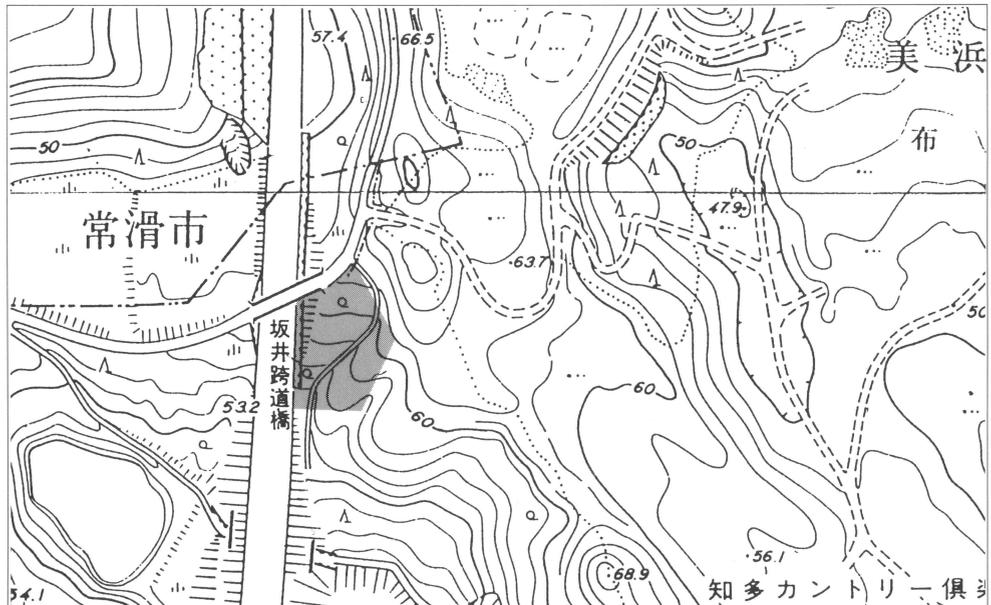
たちくす 立楠古窯跡

調査の経過 立楠古窯跡は知多半島の南部、知多郡美浜町大字布土地内に所在している。平安時代末期から室町時代に知多半島の丘陵上に数多く築かれた灰釉系陶器の古窯跡群の一つである。知多中央道拡幅にともない、600㎡の面積で調査をおこなった。(鷲見 豊)

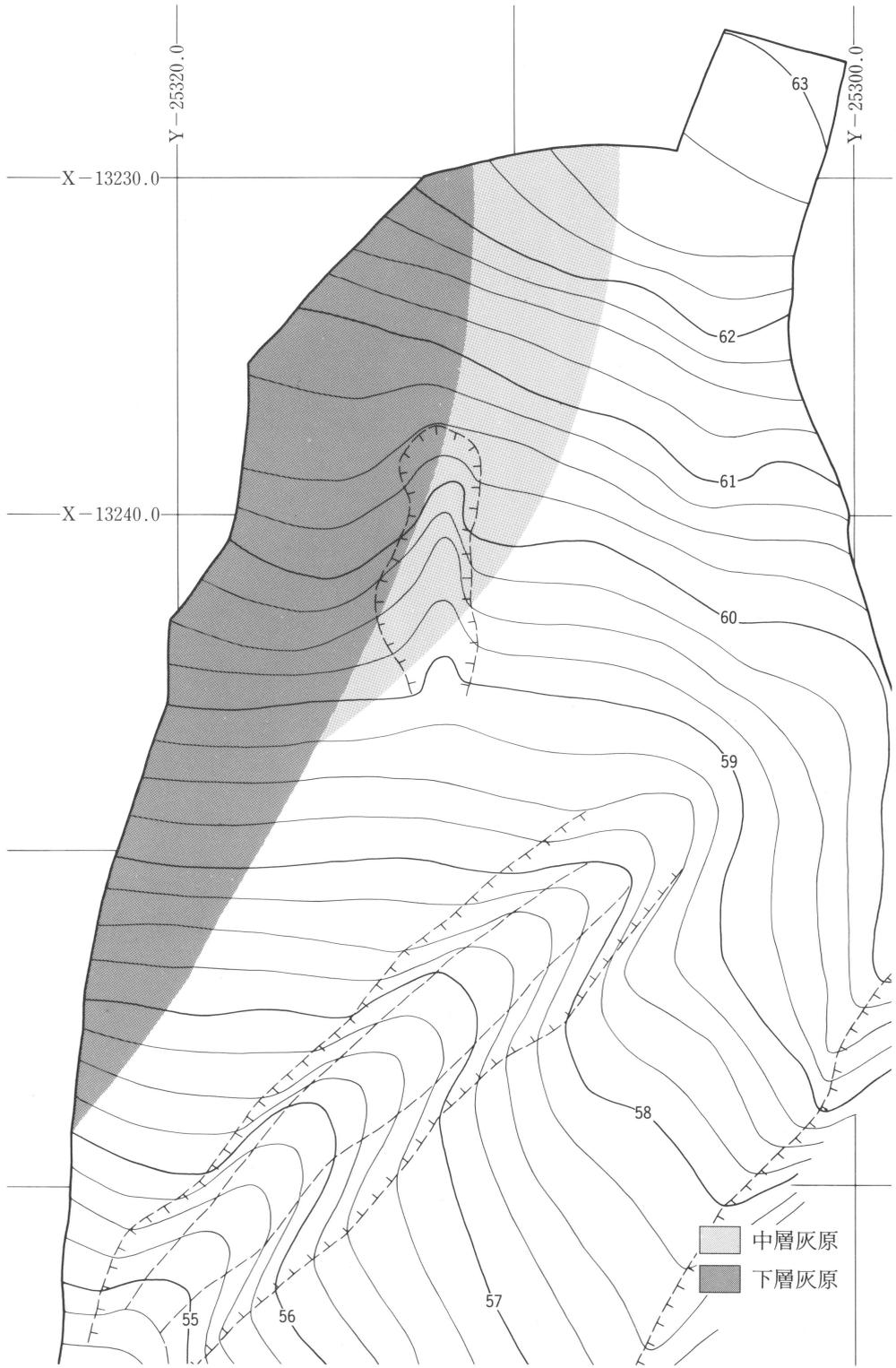
調査の概要 立楠古窯跡は知多半島の中央を南北にのびる丘陵から西側に張りだした尾根の南斜面に位置し、調査区の最高所で標高63mをはかる。

窯本体はおそらく知多中央道の建設時に破壊されており、調査区内では検出できなかった。また、ゴルフ場造成時に大きく地形が改変され、調査区の西側から南側にかけて黄褐色砂が2～3mの厚さで二次的に堆積していた。灰層の堆積は大きく三層にわかれ、それぞれに黄褐色砂の間層が入り込んでいる。灰層の分布範囲はおおむね右図のとおりで、西側はやはり道路建設時の破壊を受けている。灰層はそれぞれ最も厚いところで50cm程度あり、遺物量は灰釉系陶器の椀・皿がコンテナで約300箱出土している。遺物の時期は13世紀前半が中心であるが、間層を含めた灰層の堆積が最上層から最下層まで3m近くあるため、堆積のメカニズムや各層の遺物の時期差など、今後あきらかにしていくべき課題は多い。

(樋上 昇)



調査区位置図 (1 : 2,500)



立楠古窯跡地形測量図 (1 : 200)